

Consultants

「四国はひとつ」の思い



末澤 等

一般社団法人建設コンサルタンツ協会 常任理事

令和を迎えた昨年、四国では本四架橋瀬戸大橋の開通31周年、早明浦ダム建設を核とした吉野川総合開発による香川用水の通水開始45周年を迎えた。これらは120年以上も前に、当時香川県議であった大久保謙之丞により構想が披露され、その後4県や官民の粋を超え「四国はひとつ」のスローガンのもと、国を動かし、夢の実現や課題の解決に成功したものである。

また四国は昨年、著名な旅行ガイドブック『ロンリープラネット』が選定する「訪れるべきアジア太平洋地域 Best in Asia 2019」において、日本で唯一四国が2位に選ばれ、その一つに「四国八十八箇所巡り」が挙げられている。このような立派なインフラ、素晴らしい自然、そして世界に誇るべき歴史・文化があるにもかかわらず、四国は人口減少が全国より25年早いペースで進み、95市町村のうち約65%が消滅可能性ありとされている。このため、今後、四国地域の活性化のためには、「四国新幹線」の実現と「四国八十八箇所霊場・遍路道」の世界遺産登録に向けた遍路宿・遍路道の整備が必要であると考えられ、これらへの思いを馳せてみる。

まず「四国新幹線」のうち、本州と四国を結ぶ瀬戸大橋については、建設当時から新幹線規格（新幹線と在来線の各2線のスペース・列車荷重を考慮）で建設されていることは、あまり知られていない。この瀬戸大橋を介して四国の4県都と本州を結ぶ新幹線ルート（整備延長302km）の事業費は、1.57兆円（費用便益比1.03）程度と試算され、公共工事の妥当性が確認されている。これによる四国訪問者の経済効果は169億円が見込まれ、岡山県への波及経済効果（試算31～42億円/年）を合せると、年間200～210億円の経済効果が見込まれている。さらに新幹線沿線人口をみても、四国は338万人に対し、北陸は306万人、北海道は326万人であり、新幹線が北陸や北海道にあって四国に無いのが不思議なくらいである。

次に「四国八十八箇所霊場・遍路道」のうち、四国八十八箇所霊場とは、弘法大師（空海）が修行を行った地として伝えられる寺院のことであり、四国遍路とは、その信仰に基づき大師の足跡を訪ね、全行程1,400kmの厳しい遍路道を家

内安全・病気平癒・先祖供養などを祈りながら、各霊場を巡拝してゆく旅である。この遍路道は本来、巡礼専用で設定されたものではなく生活道等が利用され、遍路道各所で地域の人々がお遍路をもてなす「お接待」と呼ばれる風習が今も受け継がれている。

四国遍路は令和を迎えた今、団体バス遍路やマイカー遍路が主体となり、遍路人口は約10年前に比べて▲40%程度と大幅に減少している。また、宿主の高齢化や後継者難などにより過疎地域での宿不足が深刻になっており、特に歩き遍路の場合は大きな問題となっている。さらに、遍路道の維持・修復難という問題が、今後遍路文化の維持・継承を揺るがしかねない。

これらの問題を解決するための糸口として期待されているのが「歩き遍路」とりわけ外国人の歩き遍路である。既に世界遺産に登録されているスペイン・サンティアゴ巡礼路や熊野古道では、グローバル化・デジタル化という時代潮流に乗り、「巡礼路の歩き旅」という世界的なブームが追い風となって多くの巡礼者が訪れ、地域に大きな経済効果が生まれている。四国においても、宿泊施設や遍路道など外国人が満足できる受け入れ態勢を整備してゆけば、彼らがSNSで自ら四国遍路の魅力を発信することで来訪者の増加につながる。さらに、外国人遍路が増えることで四国遍路の魅力が再認識され、新たな日本人遍路を呼び込むことも期待される。

これらのことを踏まえると、今こそ、次世代に活力のある四国を引き継ぐため、四国が一体となって全パワーを集中投下して「四国新幹線」を早期に実現させるとともに、「四国八十八箇所霊場・遍路道」の世界遺産登録に向け、外国人歩き遍路（巡礼者）の受け入れ態勢や遍路宿・遍路道の整備等に注力する必要がある。

そして、そのためには、地域の活性化と遍路文化の維持・継承との両立に繋げることができるよう、様々な課題の解決に向けて取り組むことが重要であり、我々建設コンサルタンツはその一翼を担ってゆきたいと考えている。